第６期第３回　横浜市市民協働推進委員会　会議録	
日　　時	令和５年12月４日（月）午後２時01分から４時02分まで
開催場所	横浜市庁舎18階　さくら14会議室
出 席 者	鈴木伸治委員長、池田誠司委員、大塚朋子委員、菊池賢児委員、齊藤ゆか委員、竹原和泉委員、森川正信委員
欠 席 者	後藤智香子委員
開催形態	一部非公開（傍聴者２人）
議　　題	審議事項 　ア　よこはま夢ファンド登録団体の抹消について【非公開】 　イ　よこはま夢ファンド登録団体助成金交付審査結果について【非公開】 　ウ　よこはま夢ファンドの見直しについて【非公開】 報告事項 　ア　よこはま夢ファンド登録団体の決定について 　イ　市民協働推進委員会答申（令和５年３月）の進捗について 　ウ　協働・共創の一体的取組について
議　　事	開　会 （鈴木委員長）本日は、ご多忙のところお集まりいただきありがとうございます。ただいまより、第６期第３回の横浜市市民協働推進委員会を開会いたします。 　それでは、定足数の確認をお願いします。 （事務局）本日の定足数について報告させていただきます。市民協働条例施行規則第８条第２項の規定に基づきまして、委員の過半数の出席が求められております。委員の過半数の出席がございますので、定足数を満たしております。 （鈴木委員長）ご説明のとおり、定足数を満たしております。確認させていただきました。 　それでは、お手元の次第に従って議事を進行していきたいと思います。まず、本日の委員会は、横浜市の保有する情報公開に関する条例第31条の規定に基づき公開となりますが、審議事項ア「よこはま夢ファンド登録団体の抹消について」、審議事項イ「よこはま夢ファンド登録団体助成金交付審査結果について」及び審議事項ウの「よこはま夢ファンドの見直しについて」は、公開で審議しますと公平性に欠けるおそれがございますので、非公開扱いとさせていただこうと思います。委員の皆様、いかがでしょうか。よろしいですか。 （了承） （鈴木委員長）ありがとうございます。では、ご了承いただきましたので、これらの議題については非公開とさせていただきたいと思います。 前回会議録の確認 （鈴木委員長）続いて、前回の会議録を確認します。事務局からお願いします。

	（事務局）第６期第２回横浜市市民協働推進委員会会議録をご確認いただきます。９月25日、午前10時から午前11時42分の開催。当日は、７名出席、１名欠席でございました。会議録の詳細につきましては、事前に委員の皆様にご確認いただいておりますので、説明については割愛させていただきます。 （鈴木委員長）ありがとうございました。ただいまご報告いただきました会議録について、何かご意見等ありますでしょうか。事前に展開・確認いただいておりますので、特に問題ないかと思います。こちらでよろしければ、前回の会議録については確認いただいたということにさせていただきます。 議　題 （１）審議事項 　　ア　よこはま夢ファンド登録団体の抹消について【非公開】 （鈴木委員長）それでは、審議事項に入りたいと思います。審議事項のアからウについては、冒頭述べたとおり非公開とさせていただきます。 **《これより非公開議題のため会議録の公開はありません》** （２）報告事項 　　ア　よこはま夢ファンド登録団体の決定について （鈴木委員長）それでは、続いて報告事項に移りたいと思います。報告事項ア、よこはま夢ファンド登録団体の決定についての説明をお願いします。 （事務局）では、お手元の資料４をご確認ください。よこはま夢ファンドの登録団体です。今回、申請団体数は１団体です。団体名は、特定非営利活動法人瀬谷丸、この法人は、東日本大震災の被災者及び一般市民に対して、被災した地域への復興支援及び交流に関する事業を行い、被災地の発展や地域社会と生活の再建に寄与することを主目的としております。法人認証自体は2017年１月ですが、このたび、夢ファンドの登録団体への申請があり、事業部会でご承認いただきました。 （鈴木委員長）ありがとうございます。何か質問等ございますでしょうか。よろしいですか。よろしければ、次の議題に移りたいと思います。 （２）報告事項 　　イ　市民協働推進委員会答申（令和５年３月）の進捗について （鈴木委員長）報告事項イ、市民協働推進委員会答申（令和５年３月）の進捗について、事務局から説明をお願いします。 （事務局）３月に市長宛てにご提出頂きました答申を受け、これまでの当局の事業等の進捗報告をさせていただきます。 　答申では、３つのご提案を頂いております。「地域情報の一元化・一覧化」「しな

	やかな組織運営」「つなぐ力の強化」でございます。 １つ目、地域情報の一元化・一覧化です。デジタル技術を活用した地域情報の一元化・一覧化を図る必要があるというご提案を頂いております。こちらのご提案を踏まえて、この間、市民活動情報のデジタル化ということで、市民の手元に届く地域情報、こちらの新規事業を進めているところでございます。 答申でも課題感としてご指摘がございましたが、学生や現役世代の手元に地域情報が届くような仕組みをつくるという事業です。今年度は実証実験の枠組みにて、青葉区・都筑区の２区で試験的に実施するべく、現在、諸準備を進めております。 事業者の公募に際しては、事前にヒアリング調査を実施しました。ＮＰＯ法人７団体、自治会町内会５自治会、公園愛護会１団体、併せて、実際に利用していただく想定の大学生に対しても個別にヒアリングさせていただいております。 現状、各市民活動団体が、チラシ、ブログ、ウェブ、ＳＮＳ、ＬＩＮＥ等、それぞれの媒体を使って地域情報、自分たちの団体の情報を発信しており、その団体を知っているという前提があれば、その団体のサイトやチラシにたどり着くことができるのですが、なかなかそうはなっていない現状がございます。この現状を踏まえ、横浜市で地域情報が一元化・一覧化されたサイトを構築し、各団体が簡単に情報発信できるようにすること、併せて、閲覧者の反応が分かるという着想も今回盛り込んでいます。具体例としてスマートフォンを出しておりますが、ウェブ上にも情報が整理されますので検索がかなり簡易になることと、知りたい情報にスピーディーにたどり着けるようになるということを目指し、企業募集をしております。 閲覧者の反響につきましては、ヒアリングにご協力いただいた市民活動団体の皆様からご要望があった事項でございます。デジタル技術を使って情報発信するのであれば、見ていただいた方に何か、ボタンなりメッセージなりで応援いただけるような仕組みも盛り込むべく、進めております。 実証実験の開始自体は１月以降、公開は２月を目指しております。実施に際しては、青葉区・都筑区の市民活動支援センター、地域振興課とも連携して、自治会町内会、公園愛護会にも使っていただけるよう広報ＰＲを行う予定です。あわせて、閲覧者に対する周知・ＰＲとして、青葉区・都筑区の大学・高校に対してアプローチしつつ、現役世代に対してのアプローチについても検討してまいります。 続きまして、提案２、しなやかな組織運営です。自治会町内会の仕事の細分化、分担制、ボランティア制といった着想を入れていくと担い手不足の解消につながる可能性が生まれる、とご答申いただいております。 これを踏まえ、先ほどご紹介した市民活動情報のデジタル化事業の中で、スキマボランティアと呼ばれるスポット型のボランティア募集をかけられるような機能を設けたいと思っています。このスキマボランティアという考えがウェブ上に出てくるようになりますと、地域活動に体験的に参加できる場面ですとか、部分的にお手伝いしていただけるようなボランティア募集が打ち出せるようになってきますの

	で、学生や現役世代が気軽に活動に参加できるきっかけづくりにつながります。 　続きまして、提案３、つなぐ力の強化です。いわゆる中間支援機能の強化に向けたこの間の取組について報告させていただきます。 　まずは、各区市民活動支援センターです。ネットワーク会議を７月19日に実施、12月18日にも予定しております。対象者は、各区センターの職員と地域振興課の係長、職員、加えて地域力推進担当も参加可能としています。１回目のネットワーク会議では、各区の支援センターの強み・弱みを整理するようなＳＷＯＴ分析を導入したグループワークを行い、各区市民活動支援センターの現状と、今後伸ばしていきたい部分について共有・意見交換等、活発な議論がなされたところです。２回目のネットワーク会議では、地域ケアプラザのコーディネーターより、区内施設、ＮＰＯ、地縁団体、企業等とつながることの事例を紹介いただく予定です。 　第１回目のネットワーク会議では、テーマは３つ、中間支援組織等とのプラットフォーム、２つ目は地域活動の担い手育成のための事業、３つ目は主に自治会町内会等の地域のコミュニティと区役所内部との関わりについて議論しました。様々な意見が出ましたが、学生や自治会町内会という着想の必要性が、この場でも改めて発言されておりました。 　最後に市民協働推進センターについて。中間支援組織のハブとしての機能が期待されていますが、「市民協働相談会」や「コラボレーション」というイベントで、ChatGPTや地産地消、食と農、といったテーマで意見交換、情報共有をしています。 （鈴木委員長）ありがとうございます。それでは、ただいまのご報告についてご意見があればお願いします。菊池委員、お願いします。 （菊池委員）良い検討会をやっていると思いますが、気になることが１つだけあります。人口がどんどん減って施設に余裕ができてくるか、あるいは税金で新しい施設ができない状況で、地域として使いたい施設の大きなものが１つあります。それが入っていなかったのですが、学校です。高校も県立なんかは合併しますよね。それから、生徒数も子供たちが減ってきますよね。そうすると、空き教室が出てきます。ざっくばらんに言うと、教育委員会と話が合わないのは分かっているのですが、地域としてはそこがすごく重要な施設なのです。校長先生によっては、どんどん中でカフェをやりましょうというような先生もいます。学校との連携することについてもご検討ください。 （鈴木委員長）ありがとうございます。 （竹原委員）菊池委員のおっしゃった学校は最大の公共施設で、全国津々浦々あります。学校は学校教育のためだけではないと前から言われていまして、昨年の３月文部科学省が、学校は共創空間であるということを打ち出した文章があります。その中で、全国で放課後の居場所、保育施設や公民館的な空間を設けていますし、横浜ではコミュニティハウスを併設していることが強みになればと思います。そのような意味で横浜はもう一度学校施設の在り方を考える時期に来ていると思います。

	市民協働と教育委員会マターの学校というのは全く違うものではなくて、ぜひ協働的な視野で進めるべきだと思っています。 　それから、教育委員会制度が変わり、今は総合教育会議によって市長が一緒に考える教育として強く打ち出せると思います。 　それからもう一つ違う視点で、今回の答申案に、中高生や現役世代、特に中高・大学生の世代に届けると書いてあるのですが、私はその人たちと共に創るほうがいいと思います。特に今の子たちはデジタルネイティブです。大人が考える以上のことができます。同世代に広く伝えるためにも企画の段階から参画できる仕組みをつくっていくのが新しい形ではないかと思っています。都筑区・青葉区で活動してきており、現在青葉区の青少年の地域活動拠点をやっています。町内会の健康づくりウォーキングマップを一緒につくって欲しいということで高校生・大学生が参画し、高校生が一緒に歩き、動画をつくりました。さらに大学生がブラッシュアップして動画を作成しましたが、そのために町内会役員がＬＩＮＥでつながれるようにする等、学生の力でＤＸ化があっという間に進みました。そういう意味で、中高生・大学生は情報を届ける対象、サービスの対象ではなくて、共に創る人だということに変換されたらどうかと思ってこれを読ませていただきました。 （事務局）ありがとうございます。今回、先ほどご紹介させていただいた地域情報のデジタル事業につきましては、あおばコミュニティ・テラスの関係の方々など、いろいろな皆様とも意見交換させていただきながら、よりよいものをつくっていきたいと思っていますので、ぜひご知見等いただきたいと思います。 （竹原委員）大人がつくり上げ完成してから、ジョイントするのではなくて、まだ半熟卵のようなときのほうが効果があると思います。今日はあおばコミュニティ・テラスの紹介カードを持参したので、配らせていただきます。 （事務局）菊池会長からご指摘いただいた学校の関係も、つなぐ力の強化ではかなり大きな位置を占めていると思いますので、今後、施策を展開する際の検討で考えていきたいと思っております。 （菊池委員）よろしくお願いします。 （鈴木委員長）では、齊藤委員、お願いします。 （齊藤委員）とてもいい案だと思いますが、幾つかあります。まず、１つ目のデジタル化については、先ほど竹原委員がおっしゃったように、やはり現役世代とともにというのはとてもいい案だと思います。その上で、実際に届けるとなると、こういうものをつくりましたから使っていただけませんかというふうに、要は営業しに行かなければいけないという状況になるのですが、一緒につくればそれが同時に営業になるというところが一つメリットとしてあるかなと思います。２つのタイプがあると思うのですが、一生懸命つくったものを、こういうものができましたと市役所のホームページに出すというのはあるとは思いますけれども、実際にはあまり効果がないと思います。横浜市の教育委員会が大学に説明会に来てくれたりというの

	がよくあるのですが、そういう形で学校の中に入って10分でも15分でも30分でも時間を確保して、実際にその時間中に登録してもらうという形になれば、あっという間にそういうことができるかなと思います。ちなみに、今、私が所属している神奈川大学では、ボランティア論というボランティアの授業に200人おります。正直、大学生は何かやってみたいという気持ちで授業等を取っておりますし、大学の中にも、あるいは中学や高校の中にも、そういった地域に接するような授業や時間というのはタイミングがあろうかと思いますので、そのタイミングをうまくつかんでいけば、そこに入り込むことができるかなというのが一つあろうかと思います。 　２つ目ですが、ボランティア活動への参加を希望する学生たちが、一時的に５月から７月にかけていろいろな組織や窓口に電話をかけ、自分たちでボランティア活動先を探すという事態になり、多方面にご迷惑をおかけしてしまいました。自分の住んでいる地域の社会福祉協議会のボランティアセンターや市民活動センターへのアクセスの仕方などは教えているのですが、実際には学校の帰りにちょっとできるといったことで、高校生や中学生のやりたい時期というのは集中してしまうということがあります。一過的な花火みたいになって、あとはやらないという状況、やりっぱなしというのが若者の特性でもあり、そこで残っていく学生がそのうちの１～２割という感じになるのかなと思います。したがって、しなやかな組織運営とつなぐというところでは、スキマボランティアのプログラムというのがとても重要だと思います。 　現在、西区の社会福祉協議会では、神奈川大学みなとみらいキャンパスと連携し、ＱＲコードを活用しながら、多種類の非常に良いボランティアプログラムをつくってくださいました。こういった優れたつなぐ力やプログラムがあるところと受入体制が連携しない限り、単なる情報を出して個々人で終わってしまい、地域全体がボトムアップするのにつながらないところがありますので、スキマから継続へとつながるような道筋が重要です。単なる体験をして１回で終わりとかそういう形ではなくて、こういうプログラムに参加したい人はという形で、期限のある半年間のプラットフォーム方式とか、そういったプログラムを幾つか、つなぐ力の強化の部分でつくっていく形になれば、定着も可能かなと思います。 　夏休み中にボランティアに参加した学生が、何十人も残り、秋にも活動を継続し、自分たちで起こしたりということにはつながっているので、やはり最初の一歩は非常に重要で、その後の大人の応援とか受入体制とか、そういったところをつなぐ力に、大人に託していくということがさらなる継続につながるのではと思いました。 （事務局）ありがとうございます。今回ヒアリングをやっていて、齊藤委員がよくおっしゃる、大学生がボランティア活動や地域活動に実はすごく興味・関心を持っているんだなというのがはっきり見えました。ただ、情報がとにかく手に入らないと。ネットで調べても、近所でちょっとやれるという情報がほとんどない。特に横

	浜は情報が弱いということは何度か言われまして、まずはその辺に応えられるようなものをつくっていきたいなと思っています。同時に、先生のおっしゃったプログラムの作成というところが肝になるのかなと思っていまして、今の自治会町内会やＮＰＯ法人、市民活動団体向けに、スポットで何かボランティアやお手伝いを切り出していただけるような仕掛けを次年度以降考えたいと思っています。このあたりはデジタル技術で云々ではないところだと思いますので、同時並行で何か施策を打っていく必要を我々も感じています。引き続き、ご指導いただければと思います。 （鈴木委員長）ありがとうございます。では、池田委員、お願いします。 （池田委員）今のボランティアの年齢層を見ると、70代が一番多くて、60代が多くて、次が20代だったりします。齊藤委員のお話を聞いていて、そういう学校や大学の働きかけのおかげもあるのかなと感じました。答申に関して、地域情報の一元化・一覧化というところで、検討している段階でもお話ししたのですが、福祉系では健康福祉局がヨコハマ地域活動・サービス検索ナビという仕組みをつくっていて、そこでは、サービスを利用したい人と、活動したい人も活用できるような仕組みにしているんですね。以前お聞きしたときは、仕組みをつくる際や、また、今ある仕組みを紹介していく形でも連携していけたらみたいな話があったのですが、その辺の整理がどうなったかという話を聞かせてもらえたらなと。 　また、しなやかな組織運営やつなぐ力というところでは、市民局系の地域活動でも福祉系の活動がたくさんありますので、デジタル技術の前に何か必要だという話は、まずは健康福祉局との連携からというのを私は感じました。 （菊池委員）すごくあります。おっしゃるとおりです。 （事務局）１点目のヨコハマ地域活動・サービス検索ナビとの連携についてですが、企画段階から健康福祉局の地域包括の担当とも意見交換しました。市民局の事業は学生や現役世代をメインターゲットにしている一方で、ヨコハマ地域活動・サービス検索ナビは高齢者の健康づくりの着想から事業を組み立てておりますので、当面はターゲットで整理しつつ、将来的には統合も目指すといった話を庁内で進めているところでございます。例えば、健康福祉局地域包括ケア推進課が行っているプロボノ、ハマボノ事業というものがございます。これもゆくゆくはうまく整理した形で公開していきたいと思っております。 　庁内には局間連携会議という会議がございまして、その場に健康福祉局も参加しておりますので、市民局から随時事業進捗は共有し、連携を密にしているところでございます。市民局系、健康福祉局系という縦割り感が出てしまう懸念がございますので、その辺は少し時間がかかるかもしれませんが、我々としては丁寧に協議しながら進めていきたいと思っております。 （池田委員）ありがとうございます。将来的にかなり人が少なくなっていく中で、市民活動系と福祉系それぞれで考えていけるのかなということを感じているので、ぜひうまく連携していけたらなと思います。

	それから、健福系の活動ですが、ヨコハマ地域活動・サービス検索ナビの関係では、サービスとしては高齢者対象ですが、活動者は別に若い人でも構わないですから、そちらのほうもニーズはあるので、その辺の調整もうまくできるといいなと感じました。 （鈴木委員長）ありがとうございます。情報は一元化することは大事ですが、一元化するところが閉じてしまうと、ほかのシステムに情報を引っ張っていけない課題も生じます。なるべくシンプルに、いろいろなシステムで情報を共有できるように考えていただければいいかなと思います。当然、例えば公園愛護会は環境創造局が所管していますので、局間連携の必要があります。横浜ではシティプロモーションで住みたくなる都市にしていこうというような話がありますが、大きなくくりでいうと地域の情報の一元化も同じ発想です。こういう仕組みができて誰に情報を伝えるかというときに、大学生もそうですが、転入された人にこういう情報が行くようになってくるといいのではないか。各大学にはいろいろな学生支援であり、また横浜市立大学にもボランティア支援センターというのがあります。そういうところに情報を流していただくと、ボランティアをしたい学生は結構たくさん登録されているので、そこにうまくつながるといいかなと思います。ちなみに、このサイトというのは、まず、都筑区と青葉区でスタートということですね。 （事務局）はい。 （鈴木委員長）南部の区にも回ってくるのを心待ちにしたいと思います。そのほかいかがでしょうか。 （菊池委員）１つだけすみません。せっかくだから町内会代表として一言。自治会町内会の加入率はもう７割を切ってしまいましたよね。自慢ですが、うちの連合は91％入っています。何か、これを見たら町内会に入ったほうがいいなという誘導をしてくれる仕掛けをしてください。町内会に行けばこういうものをもっと紹介してくれるみたいな、そういう作戦も入れていただくとありがたいです。 （事務局）分かりました。市民局の地域支援部の中に自治会町内会を所管している地域活動推進課もございまして、そちらとも密に意見交換をしながらやっておりますので、うまい仕掛けを考えたいと思います。ありがとうございます。 （菊池委員）よろしくお願いします。 （鈴木委員長）森川委員、お願いします。 （森川委員）とてもすてきな取組だなと思ってお伺いしておりました。提案１の地域情報の一元化・一覧化で、今いろいろトライ・アンド・エラーしながら進められていると思いますが、誰がどう記入するかがすごく大事だなと思います。そこで、情報をどう編集してアップするかというところのキュレーションというんですかね。特に今これはもうデジタル化するので、コンテンツマーケティングではないですが、一般の人が何をキーワードで検索するかというのがすごく重要だと思うのです。学生の話でいくと、例えば「市民活動」というのもGoogleで検索してくれそう

	ですが、それだけではなくて、どういう視点でコンテンツをつくっていくかというところを非常に考えて準備していくと、より魅力的なツールになるのではないかと。先ほど鈴木先生がおっしゃったような転入者の方というのも僕はすごくいいなと思いまして、引っ越してきて自分の住む地域のことを全然知らないときに、どこから入っていったらいいんだろうと。そこに地域のＮＰＯさんがいて、もちろんそこに長く住んでいらっしゃる方と出会えるので、そこで非常に魅力的な導入があり、しかもそれを横浜市が場をつくってコンテンツの精査を含めやっていただけるのであれば、とても魅力的なコンテンツのプラットフォームになるのではないかと思いました。なので、キーワードとか、どういうコンテンツマーケティングをしていくのかみたいな、そのあたりは、より知りたいなと思いました。 （事務局）ありがとうございます。本事業の事業者は、高齢者や団体の方々向けに入力しやすい画面づくり、かつ、写真を多く使って見ていただけるようなサイトの展開の実績があります。この実績をベースに、横浜の地域社会に合うようにカスタマイズしなければいけないと思っています。あわせて、おっしゃっていただいた検索性の部分も、例えば公園愛護会といっても大学生にはなかなか分かりづらいところでもございますので、「花植え」とか「公園清掃」とか、言い換えてでも検索できるような機能はその事業者から提案いただいているので、その辺もうまくシステムとして組み込みたいと思っています。 （森川委員）ありがとうございます。 （菊池委員）キャッチコピーが必要ですね。終わった後にビールで喉が潤せるとか、そういうのでみんな来るんです。 （森川委員）そうですよね。楽しさというか、検索して出会うコンテンツ、プロジェクトに楽しさがあって、自分の地域をもっと楽しくできるという見せ方がすごく大事ですよね。あとは、写真を使ってワードも整理されていくというお話でしたが、それこそ市民協働推進センターとか区の市民活動支援センターと、入力だったり情報発信についても連携して、何か相談があったらそこに行けるみたいな場づくりをしていくと、またいいのではないかと思いました。 （事務局）ありがとうございます。今、菊池会長がおっしゃった楽しさは、ヒアリングさせていただいた学生から、活動内容の魅力も大事だけど、団体の雰囲気が大事だと。終わった後にお茶を飲める時間があるかとか、お話しできる時間があるかとか、そこで決めますと言っていて、学生の側もそういうのを欲しているんだなと今回思いました。その辺もうまくシステム上打ち出せて、この活動に参加すると１時間お茶を飲めますとか、そういうのも入れられるといいのかなと。 （菊池委員）しかもサイフォンでやりますとか。 （事務局）頑張ります。 （鈴木委員長）確かに楽しいというのはすごく大事ですね。資料にこまちぷらすさんの写真が入っていますが、やはりイメージできるのがすごく大事だと思うので、

	ぜひ頑張っていただければと思います。お願いします。 （竹原委員）本当に、楽しいのが大事だと思います。さっき申し上げた町内会の活動で、動画をつくった学生が楽しかったという確かな経験から、ますます親しくなっていきました。高齢者との接点は同じ地域にいてもあまりなく、双方向性ができ、その学生たちが町内会の会議にどうしたら出られるのですかと言ったときには驚きました。まちづくりをするならもっと地域の会議にも出てみたいということで、そういう意味できっかけづくりとか、スキマボランティアは大事だと思います。そういう意味で広く募集するだけではなくて、ローカルに深く募集するという視点もあります。ネットは全世界に広がるとともに、地域を耕す材料にもなるので、デジタルで使うというのはとてもいいことだと思いますが、そこで一元化することをあまり急がなくても、一覧化でも十分いろいろなものが出ています。例えば、子育て世代のためには子育てマップがあり、区内の子育て関係の施設や活動の情報があります。また障害児者のためのネットワークや相談窓口が一覧になっていることもあり、そういう意味で一覧化というのも大事なのではないかと思っています。さらにアナログと一体的に推進をするときは、区の市民活動支援センターの機能が重要になり、そこでは地域の主な活動団体や中間組織と連携ができているかどうかということも重要なポイントです。そういう意味で、市民活動支援センターのネットワーク会議の在り方が問われています。次回会議があるから誰か行ってきてよという会議が多いのでは。どういう人が出席し、どのように話合いが進んだのか、そこからどういうアクションができたのかというところを明確にしていかないと、いつも会議には行っていますという答えしか出てこないのでは。ぜひ皆さんのファシリテート力を発揮し、本物の会議にしてほしいというのが切実な願いです。よろしくお願いします。 （事務局）ありがとうございます。今、竹原委員からご指摘いただいたとおり、区域内の福祉施設も含めたプラットフォームづくりが重要だと思っています。施設間連携会議はほとんどの区で実施していますが、今回改めてＳＷＯＴ分析なども活用しながら、自分たちがそれを有効に活用できているのかを振り返り、各区の状況等の意見交換を行いました。その結果、ほとんどの区で、せっかく手数と労力をかけているのに自分たちにとってももったいないという気づきを得ていた方が多かった印象があります。７月のネットワーク会議では、各区の市民活動支援センターが自分たちなりにどうやったらこの区域内にあるステークホルダーともっと有機的につながり、有効に活用するための会議体なりができるかというのを、各区なりに考えていただけるきっかけにはなったのかなと感じているところです。今後は市民局として、各区でもこれを受けてどのように取り組んでいただけているかというところはアフターフォローしていきたいと考えております。 （鈴木委員長）よろしいでしょうか。 （齊藤委員）先ほどから話しているキーワードが非常に重要かなと思いますが、確

	かに楽しさというのは重要かなと思います。大学の近隣で、ある町内会と一緒に連携しているのですが、スポットでもいいので、やる事業について月１か月２でやっていることを体験ボラで受け入れてくださいと言ったところ、例えば防災訓練をするとか、防災倉庫の片づけをする日とか、蚊の退治をするために溝に薬を入れる。これだけ聞くとすごくつまらなそうですよね。だからそこに、例えば街を歩いて写真を撮るとか、イベント性や楽しさが少し加わってくると、やらねばならないという町内会の地域での取組とそこの楽しみというのがつながってくることがあります。子供や学生たちは基本的に祭りが一番好きなものの一つかなと思うので、地域の人たちだけが準備して、お膳立てして、来てくださいとやるのではなくて、まさに先ほどから言っている「ともにつくる」の発想です。また、学生たちは、人と関わるのもとても好きです。例えば、地域子育て支援拠点のかめっ子で、子供に関わったり、コミュニティカフェで地域の人たちとコーヒーを飲みながらおしゃべりをしたいとか、こういう人と関わるものは好きかなと思います。ほかに、土に触ったり、農業とかそういうのをお手伝いするとか、それが何か楽しさになるということがあります。 　最後になりますが、やはりつなぐといったところには、地域の方々の寛容な言葉かけというのが最も重要かと思います。そういうことを知っていただくだけで、よく来たね、また来てねという、一言だけでいいからぜひ言ってあげてくださいと。来てくれて助かったよとか、みんな言われたい言葉の一つなので、無理してでもその言葉かけを一言だけお願いできたらありがたいです。学生たちは、その一言の声掛けでまた次に行きたくなるということがありますので、中間支援組織がただつなぐということだけではなくて、受け入れてくださる方々がいい言葉かけをお互いにすることで、地域の人が優しかったからまた行こうかなというふうにつながってくるのかなと思います。その辺の、協働推進の協働する部分と、それが定着するような寛容な市民を育成していく部分と、両方あるといいのかなと思いました。 （鈴木委員長）よろしいですか。情報のシステムだけではなくて、どうやってそれを使っていくのか、どうやってつながりをつくっていくのかという、そういうマインドセットも含めてやはり考えていかなければいけないということでしょうか。ありがとうございます。重要な指摘をたくさん頂きましたので、今後の取組にぜひ反映していただければと思います。 （２）報告事項 　　ウ　協働・共創の一体的取組について （鈴木委員長）それでは、報告事項ウ、協働・共創の一体的取組について、事務局から説明をお願いします。 （事務局）ご説明の前に、一体的取組の一つとして10月末に開催いたしましたイベント、ヨコラボ2023につきまして、開催のご連絡が大変遅くなってしまいました。

	大変申し訳ありませんでした。以後、このようなことがないように、イベントの開催等については適宜ご連絡させていただきますので、引き続きよろしくお願いいたします。 　それでは、議題のご説明をさせていただきます。お手元にございます資料６－１をご覧ください。令和５年６月から市民協働推進センターを中心に進めている協働・共創の一体的取組の試行実施について、進捗、状況のご報告をさせていただきます。 　まず、「１　はじめに」にありますように、今回の試行実施では、協働と共創の一体的取組を進めることで、それぞれの取組に相乗効果を生み出すことを目指しております。また、試行実施が６月から開始したため、市民協働推進センターでは令和５年度事業計画をベースとして、一体的取組の試行に取り組んでおります。 　次に２としまして、試行実施する５つの機能になります。こちらも第１回の本委員会で資料をお示ししてご説明させていただきましたが、市民協働推進センターの機能と、共創が協働推進センターで取り組む機能のうち、相乗効果が期待できる記載の５つの機能について試行実施しております。 　次に、この５つの機能につきまして、機能ごとに検討及び取組状況をご説明させていただきます。なお、一体的取組につきましては週１回程度、市民協働推進課、政策局の共創推進課、横浜市市民協働推進センター、そしてよこはま共創コンソーシアムの４者で定例会議を行い、随時検討を進めています。会議では、各自の取組や事業についての共有から始まり、上記の５つの機能を中心に相乗効果が期待できる取組について検討を進めている状況です。 　では、それぞれの機能ごとのご説明に移らせてもらいます。 　まず、（１）総合窓口の取組についてです。協働・共創の取組に対する相談等への一体的な対応、デジタルを活用した受付や各分野の専門性の高い人材との迅速なマッチング等について検討を進めております。また、一体的な相談対応を視野に、市民協働推進センターを活用した共創に係る相談対応を実施しております。 　次に（２）情報の蓄積・活用・発信機能の取組についてになります。社会課題や地域課題の解決に向け、市民活動団体やＮＰＯ法人、企業などの多様な主体と行政との協働・共創の取組をさらに推進していくため、新たな公民連携の発信・対話の場として「ヨコラボ2023（YOKOHAMA Co-lab. 2023）」を開催しました。また、市庁舎低層部でのイベントと連動する形で、市民活動団体や企業等と活動ＰＲやＳＤＧｓ推進に向けた取組を実施しました。その他、情報の蓄積・活用として、双方が有するＮＰＯ法人や企業情報の一元化及び活用についても検討を進めております。 　ここで、10月末から11月頭にかけて実施しました「ヨコラボ2023」の簡単な説明をさせていただきます。「ヨコラボ2023」ですが、協働・共創、新たな公民連携の発信・対話の場、また、子供・若者と地域活動の楽しさや魅力を共有する場として開催いたしました。一体的取組の５つの機能の中の情報発信、交流・連携、人材育成

	など、複数の機能に係る取組です。ＮＰＯ・企業・地域等の多くの関係団体及び小学校、市の関係部署が参加し、観覧者も含め、期間を通じた全参加人数は、1161人となりました。 　次に、実施した主なプログラムをご説明させていただきます。まず、10月30日に実施しましたオープニングセッション「次世代の公民連携－ヨコラボ－」。このプログラムでは、市民協働推進センターとよこはま共創コンソーシアムの協働・共創の２者に加え、ヨコハマＳＤＧｓデザインセンターをお招きし、協働・共創といった分野を越えて、中間支援組織の連携の広がりと多様な主体が連携した取組のさらなる展開など、広がりによって期待されることをトークセッションを通じて発信いたしました。 　同日午後には「市民協働の経験から見えてきた協働・共創の未来」として、本市と市民協働事業に取り組む団体をお招きして、事例発表とパネルディスカッションを行いました。パネルディスカッションでは、それぞれの団体の協働先である行政側の担当者も参加し、双方の視点から協働するための工夫や視点を深掘りするとともに、今後の共創の可能性についてもお話し合いいただき、発信できたと考えています。 　11月１日・２日には「ハマッコラボ」を実施。社会課題について、協働・共創の取組をしている子供たちによる活動のプレゼンテーションやその活動の中で開発した商品の販売等を、市民協働推進センターを中心に市庁舎低層部で実施しました。記載の４校９クラス280名を超える児童が参加しました。 　続いて、11月４日開催の「よこはまの未来の作戦会議」。企業や地域の方と連携し、地域貢献等に関する取組を行う「はまっ子未来カンパニープロジェクト」という事業に取り組んでいる子供たちが、自分たちの活動紹介や他校の子供たちとの交流、未来の横浜について対話する場として実施しました。交流・意見交換を通して子供たちが活動のヒントを得たり、意識を高める機会となったと考えております。 その他にも期間中に複数のプログラムを実施しました。参考にチラシを資料の最後につけさせていただいていますので、ご確認ください。 以上、簡単ではありますが、ヨコラボ2023のご説明になります。 　では、改めて（３）交流・連携の取組になります。ヨコラボ2023では、地域で活動している小学生から大人まで、また、多様な主体が対話・交流するプログラムを複数実施しました。また、社会課題解決に取り組む行政、ＮＰＯ団体、企業などが参加して、課題の共有やマッチング等を図るイベント「共創ダイアログ」を10月に実施しましたが、今後も交流・連携機能をさらに意識して展開していきたいと考えております。 　続いて（４）人材育成の取組です。市内中小企業を対象に協働事例、共創事例を紹介し、協働・共創の取組について理解を深めるセミナーを実施しました。また、先ほど説明しましたが、地域人材の発掘・育成・拡大に向けて、ヨコラボ2023の中

	で「よこはまの未来の作戦会議」等を実施しました。また、リビングラボでの小学生から大学生を巻き込んだ活動について、引き続き推進していきます。 　取組の最後、（５）プラットフォーム支援の取組では、地域のプラットフォームへの支援や、中間支援組織の機能強化に向けた検討を進めております。今年度は各区の具体的な課題について照会し、個別の案件について、課題解決に向けた区との意見交換を行いました。今後は、区や各区市民活動支援センター、リビングラボなどを巻き込んだ課題解決への取組の検討・実施を通じて、地域のプラットフォームの充実を目指していきたいと考えております。また、「ヨコラボ2023」のプログラム「次世代の公民連携－ヨコラボー」のトークセッションでは、各分野でプラットフォームを形成し中間支援に取り組む組織が、分野を越えて連携する可能性を話し合っていただきました。 　最後に「４、今後について」です。３月までの今年度の試行実施の結果を検証し、令和６年度以降の当面の目標を定めるなど、より効果的な一体的取組の実践を目指してまいります。また、本委員会でも引き続き取組の進捗や今後につきましてご報告させていただきますので、皆様、ご協力いただきますようよろしくお願いいたします。 （鈴木委員長）ありがとうございました。こちらについてご質問等あればお願いします。大塚委員、お願いします。 （大塚委員）前回からこの協働・共創の一体的取組ということで、主には市民局と政策局との連携だと思いますが、まち普請を所管している都市整備局でもハマノワという、横浜市型まちづくりの情報発信をされていて、ヨコラボ2023でも展示する旨の情報提供を受けています。そちらのお名前は出ていないのですが、連携して進めていらっしゃるという理解でよろしいでしょうか。 （事務局）期間中の10月30日、31日のアトリウムイベントの際に啓発ブースを出し、観覧者にアンケートをとるなど、連携いたしました。 （大塚委員）ありがとうございます。多分、市民の側からすると、発信をどこから見てどう入るかみたいなところもあって、ここから連携を進めていかれるということなので、そのあたりは期待していきたいと思っています。 （菊池委員）一般市民がこういうところにたどり着くのは難しいですよね。 （大塚委員）あと１点だけ、１つ前の議題に戻ってもよろしいですか。申し訳ないです。まさにスキマボランティアでこまちぷらすの写真を使っていただいていたのでご紹介させてください。こまちパートナーという、子育て中の方のボランティア登録がございます。こちらに登録された方のお一人は、戸塚に転入してきたばかりの方が話せる会や自主保育の会を立ち上げられています。また、お一人は弁護士さんでお仕事に戻られたのですが、プロボノ的に今でもこまちの活動を助けてくださっています。その他、スタッフになったメンバーもいますし、３名ぐらいはフルタイムで仕事をしながら、それこそスポットで、３年ぶりでも４年ぶりでもお祭りの

	手伝いとか、この日の調理ボランティアさんが足りませんと募集すると手を挙げて来てくださっていて、５年間関わりが続いているのがありがたいなと。恐らく、これからボランティアをされようと思っている学生さんのスキマボランティアも、現役世代の方のボランティアも、本当に年に１回とか、それっきりになるかもしれないですけれども、３年、５年ぐらいのスパンで、そのたった１度のボランティア経験が、あそこの地域団体でこういうお祭り手伝ったなとか、こういった団体があったなというところにつながるので、どれだけ効果があるかという実証ではなかなか短期的には見えてこない部分です。それぐらいの長期スパンで見ていけるといいのかなと思いました。デジタル化やデータ化で敷居が低くなっても、結局行った先でどんな方々と出会って、人と会ってどれだけ楽しかったか、つながるかというところなので、めぐりますけれども、コーディネートできる人材がそこにいることも大事だということを考えていました。もし可能であれば、これから育休を取るお父さんも増えていく中で、子連れ参加オーケーの地域活動、ボランティアがもっと増えていくようにというところでは、どういったデータが出てくるかにも取り入れていただけるとありがたいかなと思っています。ごめんなさい、話題を戻してしまって恐縮です。 （鈴木委員長）ありがとうございます。よろしいでしょうか。 （事務局）ありがとうございます。 （鈴木委員長）そのほかご意見等あれば。ちなみに、ヨコラボは来年もやるのですか。 （事務局）実証実験の結果を検証をした後になりますが、今のところ実施する予定ではおります。 （鈴木委員長）先に議論した、今やっている取組をこういう場で報告したり、情報発信したり、それに関わってくれる人を増やすようなことがこういう場でできるといいなと思って聞いておりました。ぜひご検討ください。 （事務局）承知しました。ありがとうございます。 （鈴木委員長）では、竹原委員、お願いします。 （竹原委員）ヨコラボ2023の最後の日11月４日の「よこはまの未来の実践会議」に参加させていただきました。「ヨコラボ2023」は新しい試みとしてすばらしいと思います。チャレンジだと思いますが、今後の工夫が必要だと感じました。「実践会議」に中高生、大学生に出てほしいということで参加したのですが、プログラムをこなすこと、実施することだけにエネルギーをかけているということが学生たちにも伝わってしまい、「僕たちの意見を本当に聞く気があるのか」という厳しい意見がありました。さらにここで出た意見や気づきをそれぞれの局や組織でどう生かすかとか、来年にどう生かし、どう動くのか教えていただきたいという意見がありました。横浜のまちづくりや社会課題の解決にどうつながるのか。特に次世代に期待して小学生から参加していましたが、「15歳までに地域に深く関わった子供は地域の担

	い手になる」という明確な実証があり、ぜひ本気で受け止めながら次のステップをつくっていただけるようにと思っておりますので、その後の動きを教えてください。 （事務局）ヨコラボ全体についても振り返り等、４者で集まり、議論を進めていきたいと思っております。また、実践会議のような若者、高校生や中学生を巻き込んだような形の地域活動を盛り上げるプログラムは、引き続き進めていきたいと思っております。ただ、実際にそのアプローチをどのようにするかという点については、検証を踏まえ検討していきたいと思っております。 （竹原委員）ありがとうございます。 （鈴木委員長）それこそ、竹原委員がおっしゃられたようにプロセスに巻き込んでいくとか、何か来年に向けてできることがあればいいなと思って聞いておりました。ぜひご検討ください。 （事務局）分かりました。ありがとうございます。そのような形でご参加いただければ、取組も大変充実するかと思います。参考にさせていただきます。 （鈴木委員長）そのほかいかがでしょうか。よろしいでしょうか。ありがとうございます。それでは、報告事項は以上となります。 （３）その他 （鈴木委員長）その他に参りますが、事務局から説明をお願いいたします。 （事務局）本日は、長時間にわたりご審議いただきまして、ありがとうございました。次回の委員会についてご案内させていただきます。次回は３月４日月曜日の10時から、場所は市役所18階会議室のさくら14です。よろしくお願いいたします。 閉　会 （鈴木委員長）以上をもちまして全ての議事が終了いたしました。これにて、第６期第３回横浜市市民協働推進委員会を閉会いたします。次回もよろしくお願いします。ありがとうございました。
資　　料	・資料１：よこはま夢ファンド登録団体の抹消について ・資料２：よこはま夢ファンド登録団体助成金交付審査結果について ・資料３：よこはま夢ファンドの見直しについて ・資料４：よこはま夢ファンド登録団体の決定について ・資料５：市民協働推進委員会答申（令和５年３月）の進捗について ・資料６：協働・共創の一体的取組について